

歴史を生かしたまちづくりセミナー開催

平成24年12月8日、「日吉の近代建築」をテーマに、第34回歴史を生かしたまちづくりセミナーが開催された。(主催：慶應義塾大学アート・センター、横浜市) 吉田鋼市氏(横浜国立大学大学院教授)からは、慶應義塾大学日吉キャンパス開設の歴史や、キャンパス内に現存する近代建築の価値について講演が行われた。ついで23年度実施された日吉寄宿舍南寮の保全工事の設計を担当した

(株)三菱地所設計 細見聡氏・森下昌司氏による工事報告では、創建時の外壁タイルやサッシ等の意匠をできる限り踏襲するためにどのように検証を重ねたか紹介された。また、フォーラムでは、都倉武之氏(慶應義塾福澤研究センター准教授)により、慶應義塾の学生の気風や寄宿舍での生活ぶりが語られた後、渡部葉子氏(慶應義塾大学アート・センター教授)の進行により、前述の4名

によって、再び寄宿舍として蘇った日吉寄宿舍の保全工事の成果、近代建築の保全と活用の意義について、意見が交わされた。当日は、寄宿生による解説付の日吉寄宿舍特別公開(主催：慶應義塾大学)や、『ヘリテイジDAY in 港北!』と題し、セミナーと併せて、港北区内の歴史的建造物を公開する「港北OPEN!HERITAGE」(主催：港北区)が開催され、様々な形で歴史的建造物に親しむことのできる一日となった。



フォーラムの様子



日吉寄宿舍特別公開の様子

Open! HERITAGE in 旧保土ヶ谷宿

「Open!HERITAGE」は、普段見ることのできない歴史的建造物を見る貴重な機会として、横浜歴史資産調査会との共催により、今回で4回目を迎えるイベントで、旧保土ヶ谷宿を会場に、都心部以外では初めての開催となった。



大仙寺での解説の様子 撮影：米山淳一

旧保土ヶ谷宿は、旧東海道宿場として日本橋から数えて4番目。約2kmにわたる宿内がL字型に曲がる

全国でも珍しい宿場で、沿道には日本陣屋や旅籠の面影を伝える歴史的建造物などが残り、宿場として栄えていた往時の姿を偲ばせている。

えながら、旧本陣である軽部家や旅籠を営んでいた金子家、創建が元禄時代と伝えられる大仙寺の本堂や山門などを見学。普段見ることのできない歴史的資産などから、地域の歴史を身近なものとして感じる機会となっていた。

当日は、約240名の市民が参加し、横浜国立大学大野敏准教授のミニ解説を交



金子家での解説の様子



軽部家での解説の様子

横浜ゆかりの彫刻が生み出されたアトリエ ～「井上信道の彫刻とアトリエ」展～

井上信道氏は、昭和50[1975]年に横浜文化賞を受賞し、平成20年に99歳で亡くなった彫刻家で、その作品は、横浜駅西口コンコースや公園などで市民に親しまれている。アトリエは、神奈川区にある昭和初期の建物で、戦前から彫刻制作を行い続けた場として、現在も作品とともに残されている。

展示され、彫刻によって西洋館のいつもと違う表情を見ることもできた。

また、神奈川大学内田研究室による井上邸などの調査研究の内容がパネル展示されたほか、最終日には、学生による研究報告も行われ、多くの市民が熱心に耳を傾けていた。

こうした彫刻とアトリエの紹介を通じて、井上信道氏の軌跡を市民に知ってもらうため、平成25年1月31日から2月5日まで、山手234番館で「井上信道の彫刻とアトリエ」が開催された。



山手234番館での展示の様子 撮影：南信一郎

会場となった山手234番館には、氏が数多く制作した外国人の肖像彫刻や未完となった最後の作品などが

一般社団法人横浜歴史資産調査会 (YOKOHAMA HERITAGE) のとりくみ

鉄道開通140周年記念シンポジウム「横浜の鉄道と横浜駅」

平成24年は、鉄道が明治5[1872]年に新橋・横浜間に開通して140周年にあたる。ヨコハマヘリテイジでは、これを記念したシンポジウムを西区との共催で開催した(平成25年1月20日)。西区は、横浜駅が立地し、駅の変遷や鉄道の歴史がまちの形成に深く関わってきた区である。



シンポジウム会場の様子(はまぎんホールヴィアマール)

第1部の基調講演では、青木祐介氏(横浜都市発展記念館)から3代にわたる横浜駅の歩みが紹介された。第2部では、小野田滋氏(鉄道総合技術研究所)や堀勇良氏(建築史家)、梅澤厚也氏(西区区政推進課長)をパネリストに迎え、米山淳一ヨコハマヘリテイジ事務局長をコーディネーターに、パネルトーク「東海道の鉄道遺産探検」が行われ、ヨコハマヘリテイジのチームが東海道線沿いの鉄道遺産を実際に歩いて調査した成果が報告された。

また、午後には桜木町～横浜駅間の鉄道遺産を巡る見学会を実施した。当日は約200名の参加者があり、港とともに横浜の産業やまちを支えた鉄道の歴史を体感した。

コンサートinヘリテイジ 「ピアノが案内する横浜の歴史とまち Vol.2」

横浜の歴史的建造物やまちの魅力を伝えるコンサートをベリックホールで開催した(平成25年2月2日)。昨年の大倉山記念館に続く2回目で、ピアニストの後藤泉氏による山手にちなんだ選曲と演奏に、まちの成り立ちや建築の解説が加わり、居留地に様々な国の文化が流れ込



ピアノコンサートの様子

文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業

平成22・23年度に引き続き、文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業(文化庁)の採択を受け、ヨコハマヘリテイジでは年間を通じてセミナーの実施や近代建築資産に関する調査を行っている。

今年度も、市民向けセミナー、人材研修会、調査研究事業を実施した。市民向けセミナーでは、「復興が転機となった

横浜の近代建築」をテーマに、関内周辺の防火帯建築群や、紅葉に残る前川園夫設計のモダニズム建築など、これまで歴史的建造物としてあまり注目されてこなかった戦後の建築に焦点を当てたセミナーと見学会を実施した。



セミナーの様子



吉田町での防火帯建築の見学会



撮影：米山淳一

歴史を生かしたまちづくり 横濱新聞

第27号

平成25[2013]年 3月27日発行 Since 1989

よこはまの原風景へ誘う 新川家住宅主屋

大野 敏

横浜国立大学大学院准教授 一般社団法人横浜歴史資産調査会 理事



屋根を葺く美山の職人さんたち



見事に驚きあがった破風



新川家の皆さんを囲んで

新 川家は旭区今宿南町(旧都岡村日景)に所在する農家である。屋号をナカムラと称することや、過去帳に元禄没年の先祖が認められることから、300年以上の歴史を持つ有力な家であることがうかがわれる。

屋敷地は帷子川に矢指川が合流する場所の下流南岸、帷子川に沿う道の南に所在し、南西に丘陵を背負った緩斜面に構える。そして道から少し南に上がった平場に、主屋を東面して構える。日景の旧小字名は、この丘陵を背負った立地にちなむものであろう。なお、本来の新川家は帷子川の北岸、現在の国道16号線側に所在したらしいが、火災に遭遇したため現当主の祖父(明治18[1885]年生まれ)が4歳の時に現在地に移転して住宅を新築したと伝える。したがって現在の主屋は明治22[1889]年頃の建築ということになる。

主屋は間口7間半(約13.7m)・奥行4間半(約8.2m)・入母屋造・茅葺部分を主体に、背面と両側面に適宜空間を付加して生活の利便に供している。

間取りの基本は、正面向かって右側(北側)に土間を設け、土間の左側(南側)を上手として田の字型に4室を構えるいわゆる4間取り形式である。新川家の場合、上手の座敷(テイ)だけは樟縁天井を設けるが、残る3室と土間は根太天井とし、天井裏を中2階として養蚕に利用し

ていた。神奈川県下の近世古民家は、土間境に広間と呼ばれる1室を構え、その上手に2室を加えたいわゆる広間型3間取りが一般的で、4間取り民家は一部の地域や階層に限られていた。しかし幕末から明治にかけて広間を前後に2分して4間取りに変化する事例、つまり広間型3間取りから4間取りへの変化が進み4間取りが一般化する。一方、入母屋造・茅葺き屋根は両側面がいわゆる兜状である点特徴である。神奈川県下における茅葺民家の屋根形式は寄棟造が多く、入母屋造は旧津久井郡を中心に分布し、相模川流域や境川と引地川両岸および県東部の旧都築・橘樹郡にも確認される。また、兜状の屋根は入母屋造の分布地域と一致する。屋根を兜状にする理由は中2階への通風換気目的に窓を設けるため、土間側に中2階を設けることが先行したため、まず土間側の屋根が兜状に変化し、後に居室側の側面屋根も兜状に変化するものが現れた。

旧津久井郡における中2階と兜状屋根の発達は、養蚕の盛行が要因である。そもそも入母屋造の屋根形式自体、屋根裏における通風換気に配慮したものであった。そして旧津久井郡やそこに隣接する山梨県東部・東京都奥多摩地域では、幕末頃から屋根裏を多層に区画して入母屋造の破風や兜状屋根に工夫を凝らした独特の養蚕民家を生み出した。

以上、新川家住宅の主屋はその屋根形状において旧津久井郡周辺に展開した養蚕民家の成熟した形式の影響を伝えており、間取りにおいて広間型3間取りが4間取りへ変化した形式を示している。したがってその建築年代が明治22年頃と伝えられていることは妥当である。横浜地域では茅葺き屋根自体大変珍しい存在になったが、入母屋造の茅葺き屋根はさらに稀少な存在である。その茅葺き屋根の修理が昨年行われた。古写真や聞き取りから判明する川崎・横浜・相模原地域にかけての入母屋造の茅葺き屋根は、(はら) (屋根両端の三角形の部分)の屋根形状が独特の曲線と曲面によって構成されている。近在に茅葺き職人がほとんどいなくなった昨今、こうした地域色の強い茅葺きを継承することは困難であった。しかし工事を請け負った市川茂さんと茅葺きを施工した京都・美山の中野誠さんが、新川さんの記憶や各種資料を検討して、かつての破風形状の再現に挑んでくれた。今回の屋根修理は、茅葺き地域色継承という点においても重要な事業であった。なお、新川家の茅葺き主屋は、現在もすまいとして3世代のくらしが営まれている。しかも主屋裏手の屋敷地(雑木林の丘陵)は里山の風情をよく留めている。このように新川家は、横浜の原風景の一端を景観・建築・茅葺き技術・くらしのいずれにおいても継承している点ですばらしい。